



TITLE:

<學界動向> 唐宋の變革をどう展開するか：農民問題を中心として

AUTHOR(S):

池田, 誠

CITATION:

池田, 誠. <學界動向> 唐宋の變革をどう展開するか：農民問題を中心として. 東洋史研究 1954, 13(3): 221-233

ISSUE DATE:

1954-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139004>

RIGHT:

唐宋の變革をどう展開するか

——農民問題を中心として——

池田 誠

中國の歴史において唐宋時代は、經濟・社會・政治・文化などすべての方面にわたって、飛躍的な變化がなしとげられた時代だといわれる。そのことについて、あまり異論をさしはさむ餘地はないようにおもう。それにしても、その變化は、その内容として革命的な變革であろうか。それは、どのような現實的な基盤のうえにおこり、あたえられた生産關係をどのようにつくりかえ、どんな新しい社會的矛盾を發展させていったであろうか。それは、農民を中心とした、そのころのおさえつけられた民衆——生産者たちが、みずからの人間的な解放と獨立性をかちとっていく過程で、そのために有利な客觀的條件を、少しでもさりひらきつくりだしているであろうか。そこにどのような、新しい生活の場がひらけてきたであろうか。そしてもし、それらをひつくるめて、やはり革命的な變革だとするならば、それは具體的にどのような變革としてあるのであろうか。農業の生

産性はどうかであるか。土地所有關係はどうかであるか。農民による小土地所有はどうかになっていったか。大土地所有はどんなふうにして形成されていったか。それはどのような人間の社會的な階級關係をもたらしただか。その過程に、いろいろな私たちの共同體的關係はどうなつていったか。この時代に獨自にすすめられた地主による土地併合は、その具體的な追求のなかに、どういう法則性を暗示しているであろうか。都市における手工業の發展は、それとどういうふうに関連しているであろうか。これらの生産諸事情のうえになされた商業の發展は、どのようにしておこなわれ、またどのような逆作用を生産部面にひきおこしていったか。こうしてするとくふかめられてきている階級的な諸矛盾は、どのように解決されたであろうか。官僚制度はどのようにして形成され、また獨裁君主權力は、現實にどのような役割を演じているか。宋權力が、遼・金あるいはモンゴルとの民族的な對立にさらされていたことは、國內の諸事情にどのよ

うな結果をもたらしたか。こうした現實の生きる場所での、いろいろんだ諸矛盾は、どのような社會的、政治的な力關係の運動を展開し、そしてそれは、どのような意識形態をとって反映され、また發展させたか。これらの總結として、このゆたかな變革のなから、どういふ普遍的な社會的運動の法則性を發見できるであらうか。唐宋時代という、中國においてまことに獨自に展開されたとおもわれるこの變革の時期は、かぎりなくゆたかな問題をなげかけているようにおもふ。

そういった、おおくの基本的な問題は、わが國の學界で、これまでどんなふうに處理され、解決され、また解決されようとしているであらうか。

二

この變革が、まずはじめに現實的な實感にささえられてとらえられたのは、國家權力、とくに政治制度の方向からであつた。それは内藤湖南博士による、中國の△近世的▽な政治形態の發見である。この發見が、どれほど重要ないみをもつたすぐれた發見であつたかということは、つぎのようなことを考へてみただけでもあきらかであるとおもう。たとへば、「資治通鑑」という名著をよんだとき、われわれは、司馬光のたくましい政治意識のたかまりには、壓倒されるばかりの感銘をうける。そしてそこに、司馬光の政治意識をこれほどまでにはげしいものにきたえあげた歴史の流れ、そしてまたかれがそれほどまでに強化された地主としての政治的立場、したがって階級的な立場を對置して對決していかざるをえなかつたような、めだたずにいふけれども、なにかたくましい力の存在をうけとるこ

とができる。それがなんであるか、もちろん司馬光によつては指摘されてはいないし、またかれじしんというふうな問題を考へなかつたかもしれない。しかしかれはかれ流に、まことにダイナミックな政治史を展開しているなかで、それとまづ正面からたちむかつているようにおもふ。それがよむ者をひきずつてゆく。それにしても、それなしには、かれじしんの政治的（階級的）な立場もありえなかつたような、たくましい存在と對決する場所に成立した「通鑑」は、究極において天の攝理に合致するための、政治的道德の承認にねじれてしまつて、いることを否定することはできないようにおもふ。それとともにあるがままの現實からはなれて、歴史を道德的に倭小化してゆく方向をまぬかれてはいないようにおもふ。

このような歴史の中世的な倭小化から、中國史を解放するすじみちを發見したのは内藤博士ではなからうか。そこに博士は、歴史の道德的な規範性をふみぬいて、いくつかの王朝に共通する時代的な内容をつかみだし、中國史を科學的な研究の對象にすえた。その内容とはなにか。それはまず、政治的な支配形態としてつかみだされたのである。そこには、必然的に階級的な見地にたつ歴史觀がめばえているし（次節の引用を參照）、司馬光がすりぬけようとした、△たくましい存在▽をみのがしてはいないようにおもふ。唐宋の變革における政治過程のつかみかたのするどさも、そういうところに大きなひみつがあるようにわたしはおもう。

この内藤博士の近代的な中國史觀の形成ということは、それじしん一つの重要な問題であるし、べつにくわしく追求しあきらかにすることが適當だともうので、ここではこれ以上ふれない。またすでに本欄の動向で、谷川道雄氏の發言があることであるから、政治

過程の把握のするどさということについても、ふたたびくりかえす必要はないであろう。(『隋唐帝國をどう考えるか』『東洋史研究』二二)。

それにしても、歴史の△たくましい存在▽は、内藤博士によつて、どんなふうにとらえられてゐるであろうか。唐宋の變革という問題を考へてゆくとき、つぎのような發言に注目することは、あながちいみのないことではないであらう。すなわち、唐宋時代をつうじて、貴族政治から獨裁君主政治へとかわつてゆく政治過程において、農民をこうとらえている。すこし長くなるけれども引用しよう。△貴族時代には、人民は貴族全體の奴隸の如く視られたから、私有財産も認められる筈はない。隋唐の時代となり、人民を貴族の手から解放して國家の直轄とし、殊に農民を國家の小作人の如く取扱う制度が作られたが、事實は政治の權力は貴族にあつたから、農民は君主を擁した貴族團體の小作人という状態であつて、それ以外の人民は皆奴隸同様であつた。……唐の中頃からこの制度が自然に壞れて、兩稅制度となつた。……これは人民の定住を當てにせず、現住の場所によつて收稅するもので、人民を土地に附屬するものと考へられぬところより起つたものであるが、そのため人民の居住が制度上自由に解放されることとなり、又この時より漸次租即ち地代の制も變つて、穀物の代りに錢で納めることとなつて、土地の收穫物を自由に處分しうるに至つた。かくて人民は、土地に拘束される奴隸小作人たる位置から、自然に解放される端緒を開いた……▽(『中國近世史』九一—一〇頁。傍點筆者)。つまり、隋唐の均田制のもとで奴隸のような地位にあつた均田農民が、唐宋の變革の時代に、自由な農民へと解放されたのである。この内容については、たとえば△國

家の小作人▽という農民理解や、均田農民の自由な農民への解放ということについても、すでに前田直典氏や△(『東アジアにおける古代の終末』歴史一)、石母田正氏の發言(『中世史研究の起點—封建制への二つの道について—』日本史研究入門所収。『封建制成立の特質について』思想三〇二號)をはじめとする批判がある。そういつたたちいつたことはあとにふれるが、ここでもなによりも大切なのは、この變革の時代に、△農民の解放▽という問題をつかみだしていることではなからうか。そのつかみとりかたには、もちろん問題がある。たとえば、△農民の身分的、制度的な自由が、そのまま現實の階級的規定性となりうるかどうか▽といったような批判が、もちろん徹底的にとわれ追求されなければならぬとおもう。また、いまさういわれるようなオブティミズムが、やはり内藤博士の歴史のみかたをつらぬいてゐるようにさえおもう。それはたしかにそうであるが、そういうオブティミズムがどこからでくるのか。それにもかかわらず、歴史のなかに、△農民の解放▽をみとめていつた歴史のつかみ方こそ大切だとわたしはおもう。

ところで、ただちにうたがいがおこるのは、そのような農民の解放は、いったいどういふものなのか。どこからきたのか。どうして可能になつたのかということなどである。それは、『中國近世史』の展開のなかにもとめても、どうもはつきりしない。たとえば、引用文からもはつきりうけとれるが、上からの政治的な施策の結果として、△自然に▽解放されることになつたという以上に、なんらの積極的な説明もなければ、分析もない。それでは、わたしちにとつてはまことに不安である。そういう政策はどのようにしてうちだされてくるのであらうか。△君主を擁した貴族團體▽が農民を隸屬さ

せているという、そういう階級對立をみとめてゆくならば、そのような現實の場で、「農民の解放」が、まことに幸福にもどこからともなくやってくると考えるのは非現實的である。「農民の解放」が、「貴族團體」と農民という階級對立のなから必然的にうみだされてくるとするならば、そしてまた、その結果として「貴族政治の崩壊」をみちびくとするならば（「中國近世史」三一頁）、結果としてみずから没落させるような政策を、貴族自身がまちがってもやつてのけるはずはない。そのような政策、あるいは歴史の展開にたいして、貴族はやはり必死になつてそれをくいとめようとしている。それにもかかわらず、貴族が没落していったことは、現實に、貴族の支配的な地位が、したがつて貴族の支配體制がそこまでほろくすされてゐる、ということだとおもう。この墓掘り人こそ、「たたくまし」存在「」にはかならない。そしてそれこそ、この變革をいきいきとさせているものであらう。このことは、貴族の支配のもとにあった農民は、みずからの解放を、みずからのでかちとつていかなければならないことをいみしている。博士もこのことをみがしてはいないやうにおもう。たとえば、「應仁の亂」（「日本文化史研究」所收）などをみてわかる。しかしそれも、「人民にとつて結構なことなら大いにやるがよろしい」といふふうに、つめたくつきはなした場での發言になつてゐるやうに、わたしには感ぜられる。

それならば、この「農民の解放」ということ、どう考えたらよいであらうか。もはや貴族的支配のてにはおえなくなつた農民は、どのようにして形成され、どうなつてゆくであらうか。ここでは、とくにこの問題を中心にすえながら、考えてみたいとおもう。

三

均田制については、いままでいろいろの見解がとられてきた。この均田制をどうとらえるかによつて、必然的にそのうちにめばえ、生長するあたらしい生産關係のつかみかたについてもちがいがおこってくる。

鈴木俊氏のさいきんの研究によれば（「唐代均田法施行の意義について」・史淵、五〇輯）、均田制を、唐代における現實の農民支配の一つの體制としてとらえなければならぬことを確認することからはじめて、均田制が、たんに形式的なものである以上に、それは一丁の最高耕作面積（應受田額）を百畝とした土地所有制策であつて、ここに均田制の重要ないみがあるとされている。このように、均田制を、そのころの現實社會とはまったくかけはなれた、形式的な、非現實的な政策にすぎないといふみかたにたいして、社會の現實のうちに、その具體的ないみをもとめてゆこうとされたことは、おおきな前進であるといわなければならない。それにしても、均田制の「現實的ないみ」を土地所有制策としてみとめてゆこうとすれば、やはりそこには、現實にある土地私有をその前提としてみとめていふことになるであらう。國家權力が、そういう土地所有の制限をやらざるをえないやうな現實は、いったいどうなのか。鈴木氏によつては、それはとくに、貴族あるいは豪族による、土地所有の擴大という方向からとらえられている。そしてそれが、必然的に國家權力との矛盾を發展させるのである。なるほどそういう矛盾は、たしかにありうるし、またそれが國家の財政的な基礎をほろくすしてゆくことも事實である。しかし、そういう國家財政の基礎としての、農

民の生産の破綻、そして貴族や豪族などによる土地併合の發展・擴大といふことはどういふことになるであらうか。そしてまた、國家權力と豪族とのあいだの矛盾は（これを唐帝國の基本的矛盾にすることはまちがいであらう）、いったいどこからでてくるのであらうか。やはりそこには、貴族的・豪族的な土地所有とともに、農民による、小土地所有が現實にあるとおもう。豪族たちによる土地併合の發展といふことは、なによりもまず、農民による土地所有の收奪といふことであらう。隋末の叛亂も、やはりこういう敵對的な矛盾のうえに、それを解決するものとして展開されたものであらう（横田滋「七世紀初頭における内亂について」、東洋史研究、一二・五、六）。

こう考えてくるとき、そのような隋末のはげしい諸叛亂は、やはり農民をどうつかみ支配してゆくかといふことに問題があるとおもわれるし、またそういう叛亂をとりぬけたところに成立してくる唐帝國の均田制を、農民にたいしては、國家が最高の地主として、その土地を一般農民に分給し、その代償として地代たる租庸調を彼等から徴収するような、そして、豪族にたいしては、その土地所有の擴大をおさえておく政策というところえかたには、やはり疑問がおこってくる。そこで、隋唐帝國の時代における農民のありかた、そしてその生活と生産の場所であるそのころの農村社會を、あるがままのすがたにおいてとらえること、そこで豪族の土地所有がどのようにして形成されたかといふこと、この二つの問題があきらかにされなければならない。

また宮崎市定教授は、南北朝では占田的土地所有（すなわち、貴族的な占田の莊園）が盛んであったのに對し、北朝では課田的な土地經營、即ち、軍役と穀帛をそこから徴發する方法が、異民族出身

の強權君主によつて實行された（『中國史上の莊園』・歴史教育、二一・六。またこのことについては、すでに「晋武帝の戸調式について」、東亞經濟研究、一九・四においてくわしくのべられている）といわれている。そういう北朝的な土地所有のありかた、そしてその生産關係、南朝的な土地所有のありかた、そしてその生産關係とは、それらは質的にちがったものであるのかどうか。それが、隋唐帝國へと統一されるのは、いったいどういふものをもっているのか、そしてそこに成立する均田農民と豪族支配との關係をどうとらえてゆくかといふことについては、かならずしも明確な解答はなされていないようにおもわれる。政府が官僚に對して、かくの如き（隸民に比例しての給田を廢して、官位にしたがつて永業田をあたえるやりかた）占田的土地所有を公認したことは、有力者の莊園經營が前代以來引き續き盛行していた現實を、法令によつて認容せざるをえなかったからであらう（同前）といわれている。そういう有力者による莊園經營の發展は、たしかにまゝの時代をうけついで、さかんに發展していったとおもわれる。それにしても、その有力者による莊園經營の發展といふことを、どのような現實的な場でとらえてゆくかといふことこそ大切な問題ではないであらうか。

こう考えてくるとき、やはりはじめにのべたように、均田農民の具體的なありかた、そして豪族たちによる土地所有の擴大がどのようにしておこなわれたかといふことに問題はおちつく。そしてそこに、上からの政策としておこなわれる、隋唐帝國の均田制のいみもあきらかになつてくるのではないであらうか。

この第一の點について、農民は、國家權力から耕作地をあたえられ、それにたいして、農民は一定額の租・庸・調の上納、および雜

役・兵役の負擔をするということは、一般にみとめられている關係である（このような均田制を、加藤繁博士は、自作農維持制度であるとのべている。「唐宋時代の莊園の組織並に其の聚落としての發達に就きて」支那經濟史考證上所收）。しかも、現實には農民の既受田額と應受田額百畝とのあいだにはかなりのくいちがいがある。均田制のもつそういう非現實性をどうとらえてゆけばよいであろうか。そこに、給田百畝という儒家の理想（鈴木俊氏）とか、あるいは普天のもと、王土にあらざるはなしという傳統的な土地觀念の復活が考えられてくるのであらう。そしてそのような非現實性あるいは欺瞞性がなおありうような社會、その生産關係に目をそそぐとき、均田制をその虚構性においてとらえ、そこに現實にあるのは、農民にたいする國家の奴隸制的把握にほかならないのではないか、というみかたがなりたつてくる（石母田正氏）。そう考へるとき、租庸調という租稅體系は、國家權力とのあいだに、ほかのなんらの媒介物をもたない、直接的な、なまのまゝの無慈悲な農民にたいする收奪體系としてとらえられる。たしかに規定どおりの給田は与えられなかった。そしてまた、そこから、兵役と租庸調とが無慈悲にとりあげられたこともやはりそのとおりである。それにしても、それをやりとげようとするためには、くいちがいはあるけれども、とにかく耕作地を農民にあたえるというてつづきをとらざるをえないということ、それとともに、その耕作地を、農民はやはりみずからの生産要具と、みずからの生産計畫において經營し、またそれをあしに、家内手工業をもやっていると事實をみのがすことはできない。それは、奴隸という概念ではつつみきれぬものである。こういう現實は、やはり、虚構性などということであつ

さりとかたづけてしまふ具體的な關係をしめしているとおもうのである。とにかく、それは土地を媒介として、それによってその生産物の分配がおこなわれるという關係である。そうだとすれば、このような農民を、奴隸的な本質においてとらえるとなえかたには、やはり理論的なよさをうちけすことができない。ここであきらかにされなければならないのは、そういう土地所有關係と租庸調という租稅體系との現實的な具體的な關連であらう。收奪の苛酷さ無慈悲さによって、そこにある階級的な生産關係を規定する材料とすることはできない。問題はそのような收奪をあらしめている、生産關係の分析をつうじなければならぬということであるし、またそういう關係を支配者とりむすぶ農民の主體がとわなければならないとおもう。そうすることによって、もういちど唐代の農民をとらえなおしてゆくことが、いまのなによりも大切な問題ではなからうか。内藤博士のいわれる農民の解放ということも、やはりこういう場所でのみおこなわれたのである（宮崎教授は、やはりべつの表現で、唐朝三百年の比較的平和の支配の繼續は、個人的所有權を發達せしめ、同時に同時に抑へた）。
 こういふ關係が、律令制による氏族支配をささえている。唐帝國の支配、それは~~氏族~~填觀の治などといわれて、支配者によって理想化さえされている太祖・太宗の時代は、わりあいに平和な時代であり、またすぐれた唐文化が基礎づけられた時代である。このことは、均田制のもとで、農民はみずからの生産計畫にもとづいて擴大再生産をつづけてゆくことが可能であり、またそれが合理性をもっていたことをしめしている。その上にこそ、平和なすぐれた文化的創造も展開しえたのであらうとおもう（この點からいっても、たんに均

田制を虚構だとか、欺瞞だとかあつさりかたづけてしまふのは、歴史のゆたかな展開の否定にみちびく、單純な理論にすぎぬとおもう。農民は、上からの解放をまつまでもなく、みずからの力で、營々として自己の生産の場をつくりだし、それをまもり、發展させてゆくとしてゐるのである。それにささえられて、農民の經濟的な自立性はたかまり、農民の主體的な解放のための、客觀的條件がつくりだされてきてゐるのであるとおもう。均田制のもとの、このように農民の主體的解放の條件が發展してきたことは、それとともに、均田制というかたちでの農民支配を、たちおくれたものに轉化し、豪族の農民支配を不合理なものにかえつつ、兩者のあいだの敵對的な矛盾を、するどい深刻な場所へとおいこんでゆくのである。内藤博士流の「自由な農民」があらわれてくるためには、そのまえに、このきびしい矛盾をつきぬけ解決することなしにはありえない。それでは、それはどのようにしてたたかわれたであらうか。

この問題についてのつつこんだ研究はないようにおもう。農民たちは、どういう行動をしているであらうか。中唐前後からのとくにいちじるしい現象は、農民の逃亡、流民、兵役・庸の拒否、群盜、土地の典賣、地方的な市や草市の發展ということなどである。これらのことは、なをいみしてゐるであらうか。第一に、農民の土地すなわち生産の場の放棄ということであり、第二に商業關係の發展ということであり、第三に、流民あるいは群盜化は、必然的に叛亂への可能性を、刻々とつくりだしてゐるということであらう。

第二については、すでに加藤繁博士の研究がある（唐宋の草市に就いて、「唐宋時代の草市及び其の發展」）。いずれも支那經濟考證上所收。唐代の草市（鎮市、市をふくめて）は、嚴重な坊市制がおこ

なわれた州縣治以外の、地方小都市あるいは村落に發展したものである。そこでは市の制は強制されず、地方的な交換の場所として發展し、それがやがては都市の域外ににぎやかな商業區域を發展させ、「坊市の制を崩壊させるにいたるのである。そういう草市の發展をささえてゐたものは、やはり、地方農村での交換關係の發展であらう。それとともに、たとえば、廣東地方で、市における農民小商人への課税を考えてゐるような（加藤博士）、そういう農民のいきる場所が、そこにあたらしくみだされてきてゐる。そういう商品關係の發展が、農業生産にどのような關係をもち、そしてまたそれいこの農業生産關係の展開にどういふ影響をもつたかということは、今後あきらかにされなければならぬ課題であらう。そういう農民、小商人はいつたいどこからでてくるのか。こう考えてくるとき、やはり均田制支配そのものを不合理なものにおいづめてきてゐる。第一・第三の問題との具體的な關係をあきらかにしなくてはならなくなってくる。

農民が逃亡したり、あるいは流民となるということは、農民がみずからの生産と生活の場をなげすむということである。均田制的な支配のもとでは、もはや農民は擴大再生産をつづけてゆく可能性をうばわれていること（たとえば役や徴發の加重、強制などというかたちで）、均田制は、農民がいきてゆくの不合理な、非人間的な支配と收奪のしかたになつてゐるということ、いいかえれば、あたりまえでは、均田制のもとで農民はなまみをけすつてゆくいがいには、いきてゆけなくなつてゐるということをいみする。そしてまた、それゆえにかれら農民が、その生産の場をうちすてゐることは、それ自體、いきてゆく權利をもなげだすということでもあつた。農民は、

そういった、いつてみれば二重のいみでの△死▽にみずからをおとしれていかざるをえない。そこまでおいつめられながら、農民はなんとかしていきたくみちをみつけないければならないのである。そこに、まづ正面から、不合理な、ふるい権力支配と對決せざるをえなくなる。そういう農民のたたかいが展開してゆく可能性はどこにあるであろうか。農民の解放も、そういうふるい非人間的な抑壓に抗してたたかう、農民じしんによつてのみきりひらかれてくるのである。

ここで、内藤博士が、唐の貴族支配がくずれてゆく第一次的な過程として、「龐助の亂」(八六八—八六九)をとらえていることは注目しなければならぬ(『中國近世史』二五—二七頁)。この龐助の亂について問題なのは、かれの叛亂が募兵軍隊の叛亂としておこったこと。つきにもっとも大切なことであるが、亂の發展が、徐泗地方の農民大衆の支持と決定的に關連しているということであろう(王丹岑「農民革命史話」)。△龐助は人民を募集して兵隊にしたが、人民はあらそつてこれにおうじた。父はむすこをゆかせ、妻は夫をはげまし、みなすきさきをけちつてするどくし、それをもつてやつてきた▽(『通鑑紀事本末』卷三六)というような、壓倒的な支持を、農民大衆はかれの蜂起軍にあたえ、かれの勢力をつよめた。そしてそのときは蜂起の革命的 성격が、もつともはつきりあらわれたときでもあった。そして龐助が朝廷に△節鉞を請求▽し、また唐權力が△節鉞を請うのをゆるしたので、龐助はたたかをやめて、朝廷の命令のとどくのをまつた▽とき、かれは唐朝權力をうしろだてに、ふるい農民支配者にすりかわろうとしているのである。農民たちがかれを支持し、かれにかけた期待は、すくなくもそんなものではなかった

とおもう。いままで、うしろのように四方からかれのもとにあつまり、叛亂にくわつた農民たちは、またうしろのひくようにかれのもとを去つていつた。それとともに、叛亂の退潮はおおいがたく、かれは叛亂軍の増強のために、強制的に人民を兵隊としてかりあつめはじめるのである。この龐助の叛亂をもちあげてくるもの、そしてそれゆえに叛亂の敗北においても決定的な存在として、はつきりと農民のすがたがうかびあがつてきている。こういう農民のすがたの底にあるものはなんであるか。

△二重のいみでの死▽という場所にある、それゆえ農民たちを、せつばつまつた行動にたたざるをえなくしている客觀的條件のもとで、しかもなお龐助の亂に獨自な態度をとうろとした農民がある。そういう農民こそは、かれらがみずからのでてつくりあげた生産の場をまもりぬくために、あるいははわるくいえば、それにあくまでもしがみついてゆくこうとした農民である。この農民たちがどうであるかということに焦點をあわせてゆかなければならない。そうでなければ、農民が死においこまれる。叛亂にたちあがる。そしてなんらかの支配者の武力によつて鎮壓されてしまうという、まことに絶望的なすじみちしかでてこない。農民のいきかた、いや歴史の展開というものは、そのようなものではないとおもう。問題は、みずからを武装して權力との抗争にはいる農民の力量と、みずからの労働力によつて、あくまでも生産をまもりぬこうとする農民とが、一つのたちおくれてくびきのようになつた權力にむかつて、どのようにして、一つに結集してゆくかということであるし、またそのような組織化された武装を、どこからどのようにしてつくりだしたかということであろう。龐助的な指導者を否定する農民は、なんらかのじぶ

んたちの指導者（それがたとえ豪族的なものであろうと）を、じぶんたちのてによってうみだしてゆかなければならないのである。こうして、龐助の亂は、いままでとちがった方向からみると、おおくの問題をもっているようにおもわれる。これとともに、《草賊》といわれるような集團が注目される。これは、あきらかに唐朝權力にたいする、一つの常時的な武力抗争の集團であることはまちがいないようにおもうが、それはあるいは、かれらなりの《解放區》をもつていたのかもしれない。そこでどんなことがおこなわれていたかということは、非常に興味のあることである。これはいまのところ、たんなる想像にすぎない。こうしてつみかさねられたものこそ、黃巢の叛亂へと變革をおしすすめてゆくのである。

四

このような農民をどうつかみ、支配してゆくかが、そのころの支配者としての現實の問題であった。そこに政治そのものの展開があるし、またあたらしい政治的指導者がたちあらわれてくる。堀敏一氏の「唐宋諸叛亂の性格」（『東洋文化』7）はこの問題を中心として追求されている。この論文そのものについては、まえに谷川氏の動向にふれられているので、たちいったことはのべない。ただ、堀氏のいう過程をそのままとめるとしても、《個人的な恩寵》をうけるような《成り上り者》がどこからでてくるのか、また、藩鎮權力をどうとらえるかということが問題となってくる。《恩寵》ということがはばをきかすような、むしろ權力者が《恩寵》にたよらざるをえないというような事態がどういうところにてでるかかということである。さいきん周藤吉之氏によって、五代の藩鎮權力の内容は

ほばあきらかにされている（『五代節度使の牙軍に關する一考察』東洋文化研究所紀要二。「五代節度使の支配體制」史學雜誌六一—四、六）。それによると、藩鎮權力のささえとしてある武力集團（牙軍は、地方の豪民・商人・農民・奴隸その他のものによって構成される）のなかから節度使などの軍隊の指揮者がたために、唐的な身分的秩序は決定的にくずれていることが論證されている。も一つ堀氏によっておきなうと、そこにあるのは藩帥と部下とのあいだの個人的な結合關係、つまり《恩寵の世界》である。こう考えると、藩鎮のいわゆる私兵集團も、不合理な支配をのがれようとする各階層の民衆が、いちおうのじぶんのいきる場所をそこにみだしているのであり、そういう連中をつなぎとめようとするところに《恩寵》があるということになる。《恩寵》がその結合の一つの原理となっている。このような藩鎮權力が唐朝權力を決定的に否定しえないとしても、それはたんに藩鎮が中央とつながっているからということであるより、藩鎮のなかで《恩寵》以上のものをうみだせない現實にあるとおもう。そして軍隊の下剋上ということも、それが權力そのものを決定的につくりかえないのは、下剋上の場が、やはり決定的に軍隊という、寄生的な性格のわくのなかにとどまっていたことに問題がある。つまり、農民たちのたたかいの場所ときりはなされたところにそれはなりたっている。そう考えると、軍隊内部での下剋上が、ほんとうのいみでの權力の否定となり、民衆のいきる場となるためには、それは軍隊というわくをつきやぶらなければならず、そうすることによって、《恩寵》というような結合の原理を自己否定してゆかなければならなくなってくる。黃巢の叛亂は、基本的にいって、そういう過程をしめしているとおもう。

農民の、みずからの解放のためのたたかひの過程に、その支配權力としての藩鎮權力がうみだされてきたことは、**「農民の解放」**、したがって社會的な變革にたいしてどのような影響をあたえたであろうか。藩鎮權力の成立は、農民解放の力量のおおきな部分が、それにすいよせられたということである。そこには、また地主と佃戸との關係を基軸とした生産の、そしてあたらしい社會關係の場がきりひらかれ、發展してきている。

この問題をあきらかにするのにもっともおおきな力があつたのは、加藤繁博士のしごとをうけついでなされた周藤吉之氏の莊園についての研究であり、また内藤博士の方向を展開された宮崎教授の業績であろう。周藤氏には、「宋代の佃戸制—奴隸との關連において—」(『歴史學研究』一四三)・「宋代莊園の管理—特に幹人について—」(『東洋學報』三二—四)・「宋代官僚制と大土地所有」(『社會構成史大系』8)・「宋金時代に於ける莊園と佃戸の一考察—特に長安附近について—」(『東方學』二)・「宋代莊園制の發達」(『東洋文化研究所紀要』四)・「唐宋五代の莊園制」(『東洋文化』二二)・「中國莊園の性格」(『歴史教育』二一六)などがあげられる。また宮崎教授には、『東洋的近世』(一九五〇年)・「宋代以後の土地所有形態」(『東洋史研究』二二二)・「中國史上の莊園」(『歴史教育』二一六)などがある。

これまで、とくに均田制のもとにあつた農民の解放を中心にしてのべてきたが、それとともに、豪族や貴族などの直接支配下にあつた農民がどうなつていったかということ、そしてそこにとどのようなあたらしい關係がうみだされてきているかということが問題となつてくる。それは地主の土地集中を軸とした佃戸制の發展である。

佃戸制について、周藤氏は、佃戸は佃主＝地主にたいして移轉の

自由をもたず、經濟的にもかなり依存しており、身分的にも**「奴隸」**のように**「とりあつかわれていて、高率な地代を收取され、佃戸は地主にたいして經濟的に依存すると共に、未だ全く身分的隸屬關係を離脱してはいなかった」**こと、をあきらかにしている。

それとともに、**「宋代では、一般農民が佃僕となり、佃僕が佃戸へと移り、或は奴隸又は佃僕が地客に移つて行くこともあつたようであつて、やはり宋代の頃から奴隸耕作はだんだん佃戸の耕作に移つて行つたもののように思われる」**という發言がある。すなわち、(1)一般農民↓佃僕↓佃戸、(2)奴隸↓地客(佃戸)という佃戸制成立のコースが考えられている。ここで問題なのは、**「一般農民」**というものがどういふものなのか、そしてこの**「一般農民」**が佃僕へと没落してゆくということかどうかということであり、(1)と(2)のコースは、農民解放という過程でどういふいみをもっているかということであろう。周藤氏によつて、佃戸制のもつ奴隸的なふるさが発見され強調されているが、そういうふるさを見るだけでは、唐宋の變革において、その基軸となつた佃戸制の積極的ないみをとらえてゆくことはできなくなる。むしろ、まえにのべたような唐代の農民の自己解放の要求、自立性を、土地關係をつうじて上からつかみ支配してゆこうとするところに佃戸制は成立してくるのではないであらうか。そこに、周藤氏のいわれるような**「ふるさ」**を再生産してゆくとしても、それは佃戸制の展開のなかでの、農民的なよわさとしてとらえるべきであらう。農民のてによつておこなわれる個人的な分散的な小規模生産と、地主・豪族などの地代收取者による大規模な土地所有とのあたらしい矛盾を軸として、變革はすすめられているようにおもふ。ここで**「ローマの借地農民と、あた**

らしい隷屬民とのあいだには、フランクの自由農民が存在した^㉔というエンゲルスの指摘をおもいうかべる（家族私有財産および國家の起源）。佃戸制がうみだされてくる過程をみると、中國的な形態における、ヨーロッパの^㉕あたらしい文明の生みのくるしみ^㉖とおなじような過程をみいだすことができるのである。

豪族あるいは地主による土地所有の擴大は、このような農民にたいする支配をひろめ、つよめてゆこうとする努力のあらわれである。それは、農民の分散的な小規模生産の經濟的性格のうえにおこなわれるのであって、決して、地代收取の苛酷さや農民の隷屬度を前提とするものではない（したがって、周藤氏の佃戸制の追求のしかたは、佃戸制の本質をすりぬけるおそれが多分にある）。したがって、經濟外的強制ということも、地主たちが、^㉗封建的所有を實現する^㉘ための形態であり、封建的地代を最大限にすいとるためにかくことのできぬ形態として、地主の農民にたいする支配をつよめたのである。そしてならぬそれ以上のものではない。それゆえ、封建的所有を實現するための、具體的な獨自な、それぞれの客觀的條件において、いろいろのかたちをとって、それがくわえられることも自明であろう。

支配者による土地所有の擴大・發展は、周藤氏によって莊園制の發達としてあきらかにされた。そのおおくの個々の研究についてのべることは紙數のつごうではぶくけれども、それらによつて、支配者による土地所有の内部構造があきらかにされている。さらに、そのような土地所有關係の發展は、^㉙要するに唐末五代には莊園制が大いに發達したが、莊園の所有者即ち莊主は當時の權力のトレーガーの交替に伴つて變轉していった。その中でも特に宋代になつて官

僚層を形成する地方の豪族（地主）の莊園が武人支配の下に大いに發達してきたことは注目すべきである^㉚とのべ、唐から宋にかけて^㉛莊園^㉜の所有者が、貴族、武人、豪民、形勢戶、寺院そして官僚へとかわることがくわしくのべられている（唐末五代の莊園制）。

そのころの支配階級による大土地所有を、社會科學の科學的概念として^㉝莊園^㉞とよぶかどうかということとはべつとして、唐から宋にかけて、大土地所有者がこれだけめまぐるしくかわるということは、どういふことであろうか。それがそのころの^㉟權力のトレーガーの交替^㊱と密接に關連するとしても、その^㊲トレーガーの交替^㊳は、どこからどのようにしておこつてくるのであろうか。^㊴莊園制^㊵の發達が、たんにそれを政治的トレーガーの交替と單純にむすびつけることによつて解決されるならば、そこには^㊶農民の解放^㊷、つまり周藤氏によれば奴隸から佃戸への農民の地位の向上はなにかべつの世界のできごとになり、變革そのものがみうしなわれてしまうのである。むしろそのような現象のうちに、いろいろの不合理な支配をつらぬこうとする所有者を拒否して、あたらしい關係をつくりだしてゆこうとする、農民のたくましさやうけとらなければならぬし、そこにあたらしい政治的支配者や所有者がおしだされてくるとおもふ。これこそまさに變革ではないであらうか。

こう考えてくるとき、いわゆる^㊸莊園制^㊹の發展ということも、支配階級の大土地所有の強行と、農民の個別的な小規模生産とのあいだの矛盾という現實から、その矛盾の運動として、もういちどとらえなおすことが問題のかぎになつてくる。

宮崎教授の發言は、この點からいって重要であるとおもう。そのおおもかな要旨は、^㊺唐朝三百年の比較的平和な支配の繼續は、個

人所有權を發達せしめ、莊園(漢代いらい唐までの)は次第に子孫の間に細分されて、小面積を單位に分割される傾向が強かった。一方政府の莊園とも云うべき均田地においては、受田者の耕作權が次第に所有權化して固定し、土地の割換えが行われなくなった。同時に自由民の没落して有力者の佃戸となる者が多く、彼等は法制的には自由民の地位を保ちつつ、契約によって有力者の土地を租佃するもので、これが次第に隸民たる部曲に代つて農業労働者層を形成し、約言すれば、土地の私有權とその貸借との關係が判然してきた。ここに必然的に政府の政策轉換が見られたが、それが人民による土地所有を確認した兩稅法に外ならなかったのである。……宋に入つて門閥貴族に代つて、士大夫の官僚階級が現われ、これに伴つて新たな形式の大土地所有が起つた。……封鎖經濟など思ひもよらず、單調な平地で生産力の高い地を選んで買入れられ、持主は始めから資本の投資の場所として土地を探し、生産物を集めて大量的に取引した。即ち生産物の商品化が行われたので、宋以後の大土地所有は一種の資本主義的經營に變つてきたのである(『中國史上の莊園』傍點筆者)。このきわめて簡潔な敘述のうちに、唐宋の變革についての教授のみかたが、はつきりとえられとおもう。ここでの問題點は、第一に唐代の農民の土地所有權の確立ということ、第二に自由な農民が地主と契約による租佃關係をむすぶということ、第三に封鎖的な自然經濟はやぶれて、生産物が商品化していること、第四に土地所有者は資本の投資の場所として土地併合を擴大し、それが資本主義的に經營されているということ、の指摘であろう。

第一・第二の點についての問題は、すでにのべたのでくりかえす必要はないとおもう。第三・第四の點については、自由な個別的小生

産者としての農民が、官僚的な大土地所有者のもとに隸屬してゆくのをどう考えるかということである。それを地主の「資本主義的經營」のもとにおける「農業労働者」としてとらえる前提として、「資本」の存在(『中國近世における生業資本の貸借について』・東洋史研究一一一)および「生産物の商品化」が指摘されている。そこで、地主と佃戸との隸屬關係をあきらかにするためには、「資本」と「生産物の商品化」ということを嚴密に検討し、その資本が生産者をもとに従屬させてゆくありかたをとらえ、さらに、資本の所有者が、商品化するという生産物取得のしかたをとらえなければならぬ。資本も、生産物の商品化ということも、歴史の各時代に存在するし、したがって、それへの生産者の從屬もおこなわれる。それが資本主義的經營に轉化するためには、その本質的な標識として、(1)生産の一般的形態としての商品生産。(2)労働の生産物だけでなく、労働そのもの、すなわち人間の労働力が商品形態をとることがあきらかにされなければならぬとおもう。官僚地主と農民とのあいだの「契約關係」は、むしろ、官僚や商人や高利貸が、つみあげた「資本」によって土地を併合してゆき、その土地を媒介としたところに成立する農民との關係であつて、商品形態にまで純化された労働力を媒介とはしてはいないようにもわれる。また「生産物の商品化」による商品經濟の發展にしても、一時的、偶然的な性格がつよく、一般的形態としての商品生産とは、なおほど近い現實ではなからうか。そうだとすれば、官僚地主による「資本主義的經營」ということには、なお證明しなければならぬおおくの基本的な問題がのこっている。とくに、宮崎教授が指摘された、自由農民の土地所有者への隸屬ということの理解をふかめてゆくことが、

この場合もとても大切であろう。

五

これまで、内藤博士によつてとらえられた唐から宋へのはげしい政治的な變革が、基本的には、均田制のもとので、あたらしい生産關係・矛盾の運動を軸として展開されてくるという觀點から、農民の解放を中心に変革の問題を考へてきた。最後に、宋代の集權的な官僚制についてかんたんにのべておきたい。

宋朝政權は、これまでの各王朝あるいは政權と非常にちがった、獨自な成立のしかたをしている。それは、軍隊の指揮者―趙匡胤の陰謀によるクーデターによつてできあがつたものである。このことはなにをいみするであろうか。一口でいえばそれは、宋權力は下からのたたかひに、直接媒介されることなく成立したということである。またそれは、唐末から五代にかけて、農民らの被支配者たちがたたかつてきた上からの支配の不合理さ、その矛盾をそのままうけついでいるということである。現實に、あたらしい世界をうちたててゆこうとする、被支配者たちの下からのたたかひがつよめられ發展してきているとき、それと對決しながら農民支配をつらぬいてゆこうとする支配階級は、權力そのものをそういう場にしっかりとちたてなければならぬ。そこに集權的な官僚地主支配がうみだされてくるとおもうし、武人的な藩鎮支配體制から官僚支配體制への權力の變質が餘儀なくされとおもう。この支配者による農民支配の不合理さは、役法の問題としてすぐあらわれた。それになんとして農民（中小の土地所有者をふくめて）は、死を代償としてたかっている。そういう、農村における現實のたたかひにつきあへら

れて、そのような農民たちをつかみなおすための支配體制の再編成と強化とが、必然的にひきおこされてくる。それは、上からの王安石による諸改革であるとおもう。（これについては、宮崎市定「王安石の改革」、同「王安石の史士合一策―倉法を中心として―」桑原博士選曆記念東洋史論叢所收、中村治兵衛「王安石の登場―宋朝政權の性格―」歴史學研究一六二、拙稿「保甲法の成立とその展開―王安石の政治改革の問題―」東洋史研究二一六）。それは支配階級内部にも深刻な政治闘争をひきおこすが、しかしこうして唐宋の變革は完成せられるのである。こうして、隋唐帝國の成立から約四百年のあいだに、たとえわれわれが、宋帝國の官僚地主支配のもとに、ふたたびはじめの貴族支配下の農民とおなじような主要な階級をみいだすとしても、それらの階級を構成する人間は、まったくべつのものでなつていたことをみとめなければならぬ。

以上、唐宋の變革というきわめて重要な、そして複雑な問題を、とくに「農民の解放」にしばらくながら、こんごの展開の方向と問題点をあきらかにした。變革の問題は、これだけにつきるものでないのはいうまでもない。また研究の成果をとりあげるにしても、非常にかぎつて必要の最小限にとどめた。動向としてはふさわしい態度でなかったかもしれないが、むしろわたしじしん、これからこの重要な變革の追求をどう展開してゆくかがたえず、あたまたみだしていったので、こういう發想になつた。この時期について、なおおくのすぐれた諸研究があることを附記しておく。とくに、天野元之助氏によつてあきらかにされつつある中國農業の展開、また古島和雄氏の、陳專の「農書」についての研究によつてあきらかにせられた、唐宋時代になしとげられた農業生産力の發展の問題、とくに南方の水田耕作地帯の問題にふれえなかつたのはまことに残念である。